

教育を変え、常識を変え、日本を変える ～デジタル教育で実現する教育の新しいカタチ～

[2010・FW] 20721103 渡辺 健太

1. 研究の背景と意義

社会の情報化の急速な発展に伴い、情報通信技術を最大限活用した 21 世紀にふさわしい学びと学校が求められている。そこで鍵となるのは、デジタル教育である。

世界に目を向けてみると、アメリカ、韓国、イギリス、ポルトガルなどが先進的な取り組みを行っている。これら国々では、知識基盤社会における教育の情報化の必要性にいち早く気づき、国を挙げてデジタル教育に取り組んでいる。

ところが日本は出遅れてしまった。先進国と比べて 7～8 年遅れていると言われている。このままでは未来を担う若年層の能力がどんどん他国に追い抜かれていき、国としての競争力を失い、やがて取り返しのつかないことになってしまう。このような背景から本研究は、日本のデジタル教育推進による教育革新を研究のテーマとする。

2. 研究目的

デジタル教育によって日本の教育の遅れを取り戻し、教育を変え、常識を変え、日本をより強く進化させる方法を探ることを、本研究の目的とする。

3. 研究方法

文献によるデジタル教育の現状および海外の先行事例調査、統計資料によるデジタル教育の効果調査、ICT 専門家とのディスカッションを通して、新しい日本型デジタル教育モデルについて提案、考察する。

4. 研究結果

デジタル教育の議論や他国の先行事例等を研究した結果、どの国のデジタル教育も、今のところ単なるコンテンツの電子化に留まっていることがわかった。それによってある程度の成果は挙げられているが、まだまだデジタルの強みを活かしきれていないと言えない。したがって日本は、単なる紙の電子化ではなく、双方向性などデジタルの強みを最大限に活かした新しい教育の仕組みを創ることによって、他国を追い抜き大きく飛躍することができる。

そこで、デジタルを活用した日本独自の新しい教育システムを提案する。電子教科書を基盤とし、日本が持つ強みや知財を子供達に総動員するシステムだ。日本には「世界の超高齢社会」「一流のものづくり技術」「おもてなしの心」など独自の強みがある。この強みを教育に活かし、

さらに強化していくのである。例えば、お年寄りの知恵を教育に活用したり、日本製造業の知的財産を活用した創造力を養う授業を行ったり、その道のプロからおもてなしの心を学ぶ授業を行う。こうした教育は、日本ならではの「強み」を継承・強化し、ひいては日本人としての品格を養うことに繋がる。

それを可能にするのが、電子教科書である。電子教科書によって子供達は、「世界中の知識が集まった巨大図書館」と「誰とでも交流できる手段」を手に入れる。子供達は広大な図書館で自由に学び、高齢者・技術者・京都の芸妓さん等、日本の強みを持った人々が子供達を教育する先生となる。これによって「社会全体で教える」という双方向の今までにない教育の仕組みが実現し、若年層の能力を高めることに繋がる。



図 電子教科書システム概要

5. 考察

電子教科書システムを実現するためには、①協力者の獲得、②教師の役割の変化、③学力養成と強み育成の両立が課題となる。国、現場の教師、企業、それぞれが知恵を出し合って教育の情報化を進めていくことが求められる。

グローバル化した世界で個性を発揮して活躍していくためにも、日本人としてのアイデンティティを持つことが重要になってくる。日本の強みを活かしたデジタル教育によって「世界に誇れる、日本人としての強みと品格」を育むことは、世界で活躍する人材を生み出し、また国としての競争力を高めることに繋がるだろう。

6. 結論

デジタルを活用し、日本の強みを総動員し、社会全体で子供達を教育する今までにない教育の仕組み(=電子教科書システム)が、日本の明るい未来を切り開く鍵となる。